

Title	「幸福な家族」の肖像：一九世紀ロンドンの「動物史」
Sub Title	Portrait of a happy family : Animal history in nineteenth-century London
Author	伊東, 剛史(Ito, Takeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	2008
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.77, No.2/3 (2008. 12) ,p.149(329)- 179(359)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20081200-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

「幸福な家族」の肖像 ——一九世紀ロンドンの「動物史」——

伊 東 剛 史

はじめに

ロンドンの街角に「幸福な家族」と名付けられた動物の見世物が出現したのは、一八二八年頃のことである。一边が五フィートの大きなケージのなかで、ネコ、ネズミ、タカ、ウサギ、モルモット、リス、フクロウ、ハトなどが一緒に飼育されていた。図一の広告ビラには、その動物たちが仲良く暮らす姿が描かれている。

ロンドンの出版者、チャールズ・ナイトは自ら著した『メナジエリ』(動物小屋) のなかで、その「幸福な家族」を次のように説明した。

この見世物は、テムズ川の両岸を結ぶウェストミンスター橋のサリー側のたもとで公開された。稀に、ザザーク橋に移動することもあったという。興行師のジョン・オースティンは、人々の往来が激しい橋を選び、世間の注目を集めようとしたのだろう。テムズ川の南側には、ザザーカと呼ばれる労働者の居住区が広がっており、見物料は六ペニスと、付近に住む労働者でも手の届く値段に設定された。とはいって、「幸福な家族」を見物したの

この展示では自然の摂理が真逆に働いている。様々な動物が、敵対する性格をもつていてもかかわらず、



図1：「幸福な家族」

出典：C.Knight, *The menagerie* (London, 1829), p.21.

は庶民だけではない。一八四二年八月には、ある廷臣の目に留まり、オースティンはバッキンガム宮殿で「幸福な家族」を国王夫妻に披露するよう依頼された。『タイムズ』紙の記事によると、国王夫妻は「相反する性質をもつ鳥獣のあいだにある——仮にこのようない言葉が使えるとすれば——情愛」を小一時間ほど観察し、とくにヴィクトリア女王は「あまりにも斬新で独特な光景に驚きと喜びの念を露にした」ということである。⁽²⁾

本稿の目的は、この「幸福な家族」と呼ばれた動物の見世物に焦点をあて、一九世紀イギリス社会の動物觀と、動物を比較対象とした人間の自己認識や社会觀を考察することである。キース・トマスの『人間と自然界』（一九八四年）が示唆するように、産業革命期のイギリスにおいて動物愛護運動に代表される新しい動物觀が台頭したのは、人間が自然を管理する力を獲得したことだ。動物を保護すべき対象として認識するようになつたからだと考えられてきた。都市空間から次第に「自然」が消滅し、「自然」に対する憧憬や郷愁の感覺が強まつたと論じられてきたのである。⁽³⁾こうした從来の説明に対し、近年の研究は、食料や労働力としての動物に対する需要はむしろ増加しており、動物が消滅したという感覺ではな

く、むしろ溢れているという感覚が、動物観の変容を引き起こしたと指摘している。動物は、拡大する都市の生活基盤を支える重要な存在だった。⁽⁴⁾ 往來を行き交う馬車や家畜市場に密集する牛や羊は、都市住民の動物観に影響を及ぼしただけでなく、こうした動物を資源として搾取する都市の否定的なイメージをつくりだしたのである。⁽⁵⁾

たしかに、一九世紀初頭のロンドンでは動物の見世物としての存在感、意識的な観察対象としての存在感が増していた。王室所有の動物を展示していたロンドン塔のメナジエリは長い間荒廃していたが、一八二二年、新しい飼育係長によって再建され、多くの見物客を集めようになつた。⁽⁶⁾ 同じころ、エドワード・クロスがエクセター・チキンイング（現在のストランド）に設けたメナジエリも、当時ロンドンで最も人気のある見世物だった。さらには、屋外家畜取引場のスマスフィールド市場も、動物見物を楽しめる場所として知られていた。そのスマスフィールド市場で夏季に開催されたバーソロミュー・フェアには、有名な移動式メナジエリが、動物を載せた多数の荷車を引き連れ現れた。とくに、最大規模を誇るウォンベル・メナジエリは、一五台の荷車を擁しており、バ

ソロミュ・フェアの見世物の中では、最も収益をあげていた。⁽⁸⁾ さらに、イースト・ロンドンの日抜き通り、ラトクリフ・ハイウェイには動物の仲買人が店をつらねていた。そこで飼われていたのは愛玩用の小動物ばかりではない。⁽⁹⁾ 裏庭ではライオンやゾウの調教が試みられたのである。このように動物の見世物に接する機会が溢れていたなかで、ロンドンの住民にとっては、「幸福な家族」といえば、それが何を指しているのかを問う必要もないほど、街の一部と化した存在だったのである。⁽¹⁰⁾ にもかかわらず、「幸福な家族」はロンドンの歴史に登場することのない忘れられた存在になつてしまつた。その理由は、他のメナジエリや動物園と比較して、「幸福な家族」に関する史料は数が少ないのでばかりか、断片的で、目立たない史料だからである。比喩的な表現を用いれば、本稿は、可能な限り集めたそのような史料を駆使して、「幸福な家族」の肖像の背景を埋めていく試みである。

とくに、メナジエリや動物園と比較しながら、「幸福な家族」に込められた意味を分析し、当時の人々の動物観に迫ろうとする。

なお、標題にある「動物史」が含意するのは、動物を歴史叙述の中心に据えることではない。また、歴史にお

ける動物の活躍や受難を再評価するというのでもない。むしろ、その力点は、人間と動物との関係の歴史的な変化を考察しながら、人間自身についての理解を深めることがある。人間が動物をどのように認識してきたか、社会のなかで動物がどのように位置づけられてきたかという問題は、実際には、動物についてよりよく理解する」と以上に、動物を比較対象とした人間の自己認識や、動物がその重要な構成員だつた社会のあり方を理解することにつながるからである。⁽¹¹⁾

第一節 調和の喜び

ヴィクトリア女王が「幸福な家族」を見て感じたといふ「驚き」と「喜び」は、決して特異な感情ではない。むしろ、「幸福な家族」に対する観察者の反応を描写する際に、新聞・雑誌等が頻繁に用いた表現であり、当時の人々が感じた「幸福な家族」の魅力を理解する手掛かりになる。まず、観察者を驚かせるということは、観察者の予想を裏切ったり、予想を遙かに超えるものを見せたりすることで、視覚的に楽しませることである。これは、当時流行した「フリーケショウ」や「ノミのサークス」など様々な見世物とも共通する。「幸福な家族」の

場合、見物客が予測するのは、弱肉強食の様相が展開する残酷な光景だろう。しかし、それとは正反対の、情愛と調和の光景を目の前にした観察者は驚きを感じることになる。「幸福な家族」のある出来事を伝えた次の記事には、そのような感性が端的にあらわされている。⁽¹³⁾

数日前、人気者の猫が二匹の子猫を産んだ。その直後に子ネズミを見つけた飼育係は、その子ネズミを子猫の隣に置いた。すると、驚くことか、猫はこの子ネズミにも乳をあたえたのである。このことを知った同僚は、家族を増やせると思い、すぐに小ウサギを猫の胸に置いた。この猫は驚くほどたくさん乳がでるようで、小ウサギを愛情深く育てている。「幸福な家族」はみな、稀にみる愛情で結ばれて過ごしている。

「驚き」と対になる「喜び」の念も、動物の凶暴性が消失した光景がもたらした。本来ネズミや小鳥を襲うはずのネコやフクロウが、そうした弱者をいたわっているように見えた。その姿が観察者を喜ばせたのである。このように「幸福な家族」の魅力は、動物たちの小さなユートピアが、まさに観察者の予測を裏切るかたちで眼前

に現れることにあった。

しかし、このことは動物の凶暴性に敏感な感受性の存在も示唆している。実際に、動物園やメナジエリでは、そうした不安を助長する事件が多発していた。一八二六年、ロンドンのエクセター・チエインジ・メナジエリで起きたゾウの事件は、普段は従順に見える動物が凶暴化する恐ろしさを知らしめた。⁽¹⁴⁾新聞記事を検索すると、この事件の翌年から一八三四年の間に、イギリス国内で少なくとも二〇件程度の死傷事件や動物の脱走事件が起きたことがわかる。⁽¹⁵⁾その多くは荷車で動物を運びながら、各地を巡業する移動式メナジエリに関連する事故だった。なかには、脱走したライオンが近隣住民を殺傷するといふ惨劇もあつたが、とくに頻繁に起きたのは、檻に近づきすぎたり、中に手を伸ばしたりした見物客が、ライオンやトラに突如襲われ重傷を負うという事故だつた。⁽¹⁶⁾たとえば、一八三〇年一月、リーズを訪問したウォンベル・メナジエリでは、酩酊してヒョウをからかつた見物客が右腕に裂傷を負つて重体に陥つた。⁽¹⁷⁾同年六月には、ノッティンガム滞在中のウォンベル・メナジエリで、屋外で鎖に繋がれたヒョウが近づいてきた少年に襲いかかり、頭から首にかけて裂傷を負わせた。⁽¹⁸⁾さらに、翌年六

月には、ダービーを訪れたウォンベル・メナジエリで、トラを見ようと押し寄せた群衆によつて檻の前にはじきだされてしまった少年が、トラに前足で殴られ重傷を負うという事件が続いた。⁽¹⁹⁾

事故が繰り返されても、興行主は見物客が動物に過度に接近しないよう、物理的な対策を講じようとはしなかつた。安全対策に積極的でなかつたというより、見物客と動物との距離を広げると、メナジエリ見物の魅力が半減してしまうと恐れたのだろう。檻ひとつ隔て動物と対峙するときこそ、見物客の興奮が高まる瞬間だったことは、日記などに残されたロンドン動物園の体験記からも推測できる。たとえば、ある十一歳の少年は、動物園での餌やりの経験を次のように記録した。「動物園に行きました。サルがあまりにも器用に苺を食べるのにびっくりしました。トラやライオンやクマやその他いろいろな動物をたくさん見ました。ゾウに触れるのは怖かつたけれど、ゾウは鼻を後ろに引いて口を開けてくれたので、ぼくはゾウの口に餌を投げ入れることができました」。⁽²⁰⁾子供向けの自然史の本には、ゾウは明敏で従順な気高い動物として描かれていた。この記録からは、そうした本から得た知識を、本物のゾウとのやり取りを通じて確認

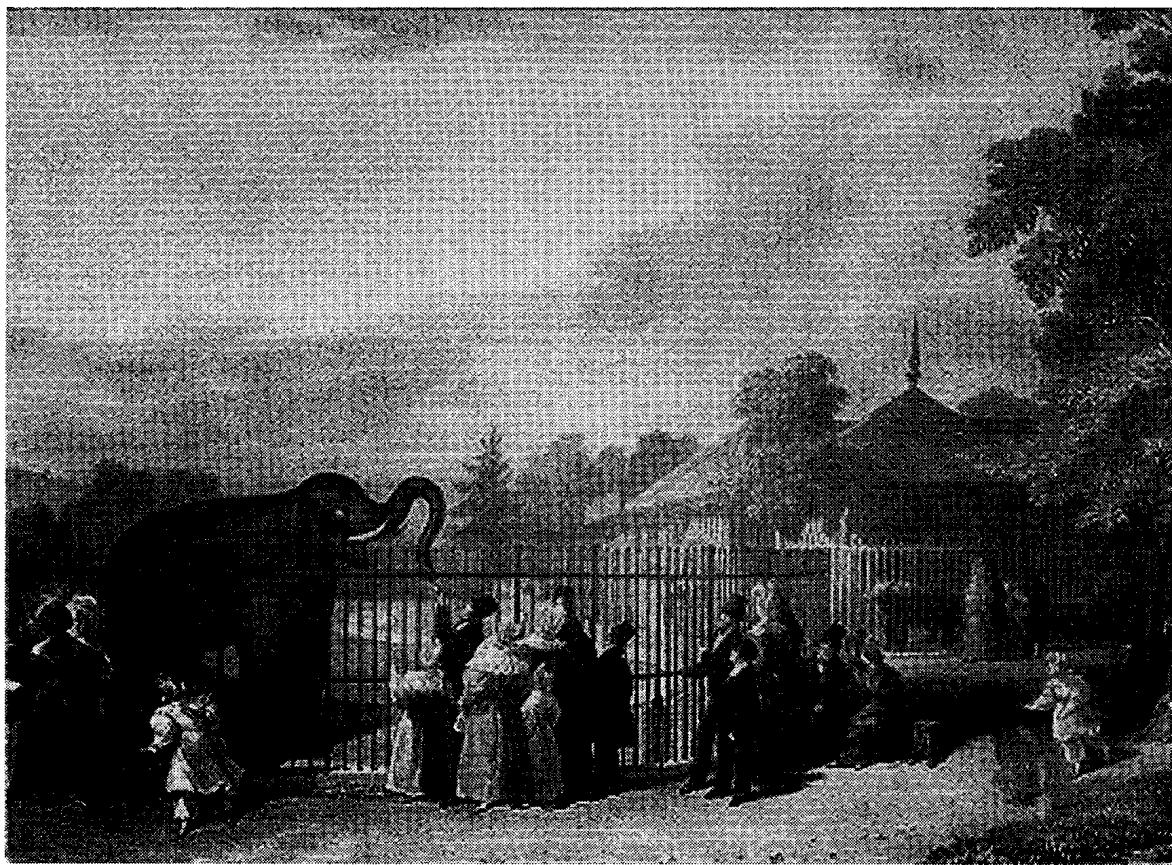


図2：「ゾウのパドックとワピチ小屋の風景」

出典：George Scharf, *Six Views of the Zoological Gardens of London* (London, 1835).



図3：「ペア・ピット」

出典：George Scharf, *Six Views of the Zoological Gardens of London* (London, 1835).

する少年の姿が浮かんでくる。その微笑ましい交流の様子を、仮に絵画で表現するとしたら、それは、ジョージ・シャーフによるリトグラフのようになるだろう（図⁽²¹⁾）。餌を与えてるのは子供ではなく、成人男性（おそらく隣の子供の父親）だが、少女は父親を通してゾウとの交流を疑似体験しているのである。家族のまわりにも熊の餌やりを描いたもの（図⁽²²⁾）など、動物園を主題にシャーフが制作した一連の作品は人気があり、動物園内でも販売された。その人気ぶりは、それまでシャーフに見向きもしなかった画商が、動物園の作品を置いていつて欲しいと頼むようになるほどだつた。

しかし、シャーフの作品が魅力的に映ったのは、それが動物園の現実をそのまま描いていたからではない。作品の主題である人間と動物との交流は、つねに保障されていたわけではない。むしろ、動物との和やかな交流を演出するには、多大な労力が必要であり、ときに入命まで失われるからこそ、シャーフの絵にはユートピアのような非現実感が漂うのである（図⁽²³⁾）。メナジエリやサークスで起きた事件は、十分に飼い馴らされたはずの動物が、凶暴になり、人間を襲うことがあることを深く印象付けて

いた。つまり、従順性とは、実は突発的に発動するかもしれない凶暴性と、表裏一体の関係にあることを人々の記憶に刻みつけたのである。もちろん、従順な動物が突然凶暴になりうる危険を、興行師はわかつていたはずである。メナジエリやサーカスでは、その危険がもたらす緊張感を利用した芸が披露された。とくに、調教師が檻のなかに入りライオンを手なずける「ライオン使い」の芸は、場の緊張感を極度に高めた。見物客は獰猛なライオンをそこまで飼い馴らした調教師に感嘆する一方、万が一、ライオンが急に獰猛を取り戻したら大変なことになるという不安に慄きながら、その光景を見つめたはずである。その不安は決して根拠のないものではない。

一八二七年にリヨンで、ライオンの口に頭を差し出した調教師が頭を食いちぎられるという事件が起き、その惨事はイギリスでも報道されていた（図⁽²⁵⁾）。従順性と凶暴性との紙一重の関係は、子供向けの小説の主題にもなっている。一八七二年にトマス・ロウが『子供の読み物』に連載した「移動動物園」という小説は、「ライオンキング」と讃えられるフランス人調教師が、興奮したライオンを手なげようとして失敗し、ライオンに殺されたところで幕を閉じる（図⁽²⁷⁾）。



図4：ライオンキングの最期

出典：Good Word for the Young, Oct. 1872, p. 546.

ロンドン動物園では、そこまで危険なパフォーマンスは行われなかつたが、飼育係による給餌の光景は、見物客に同じような心理的効果をあたえた。のちに『パンチ』の挿絵画家となるリチャード・ドイルは、ライオンの給餌の場面を一五歳のときにスケッチしている（図5）。普段は生気がなく、寝てばかりいると見物客に文句を言われるライオンが、差し出された餌を取ろうと貪欲に前足を伸ばし、檻の前に押し寄せた群衆が慄いている。文芸評論家のリー・ハントは、この群衆の心理状態を的確に表現した。ハントは『新・月刊誌』に寄稿した動物園探訪記のなかで、クマの給餌に言及し、もし、クマが檻を飛び越え餌をあたえていた自分に襲いかかってきたらどうなるか、読者も想像してみるよう促している。

クマと親しげに接する自分に気づいて、おかしく思う。パンをあたえ、どんなふうに食べるのだろうかと、クマの顔を見つめて

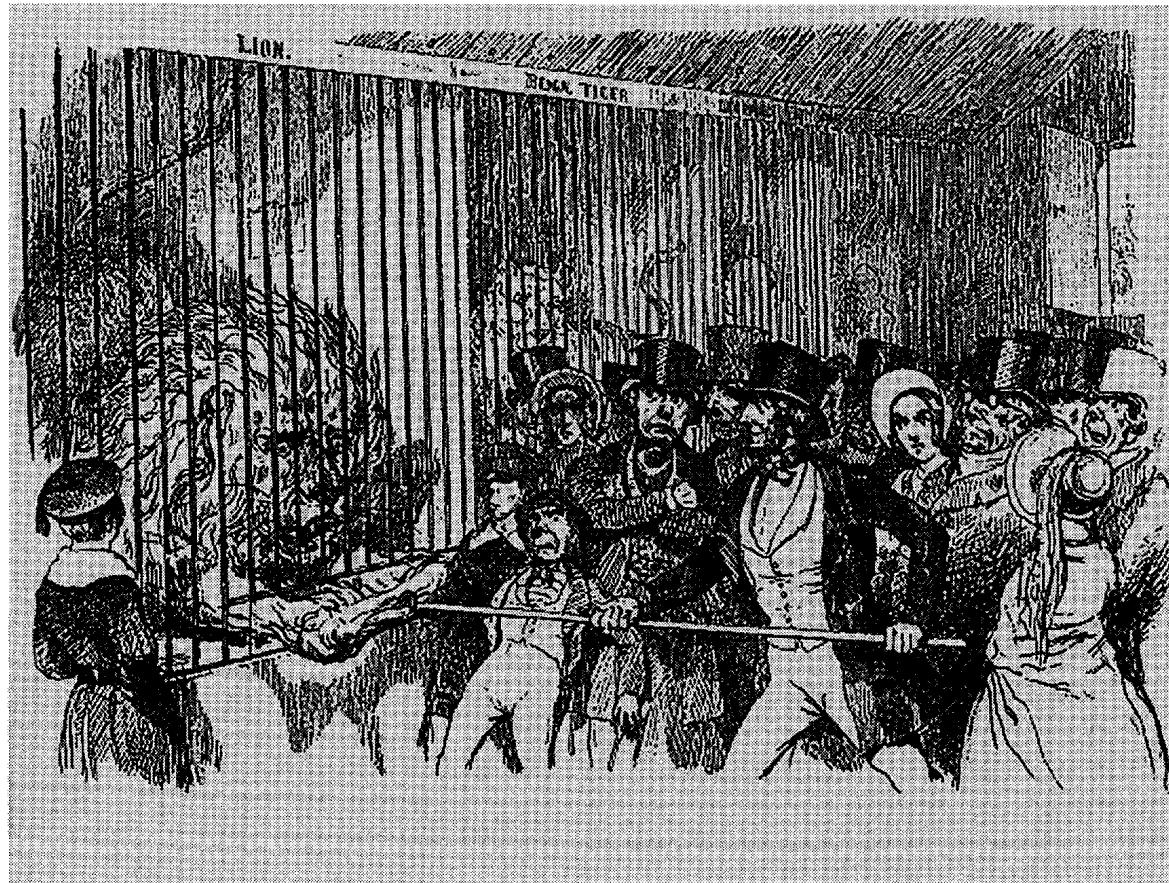


図5：ドイルの絵日記よりライオンの給餌

出典：R. Doyle, *Richard Doyle's Journal, 1840* (London, 1980), p. 117.

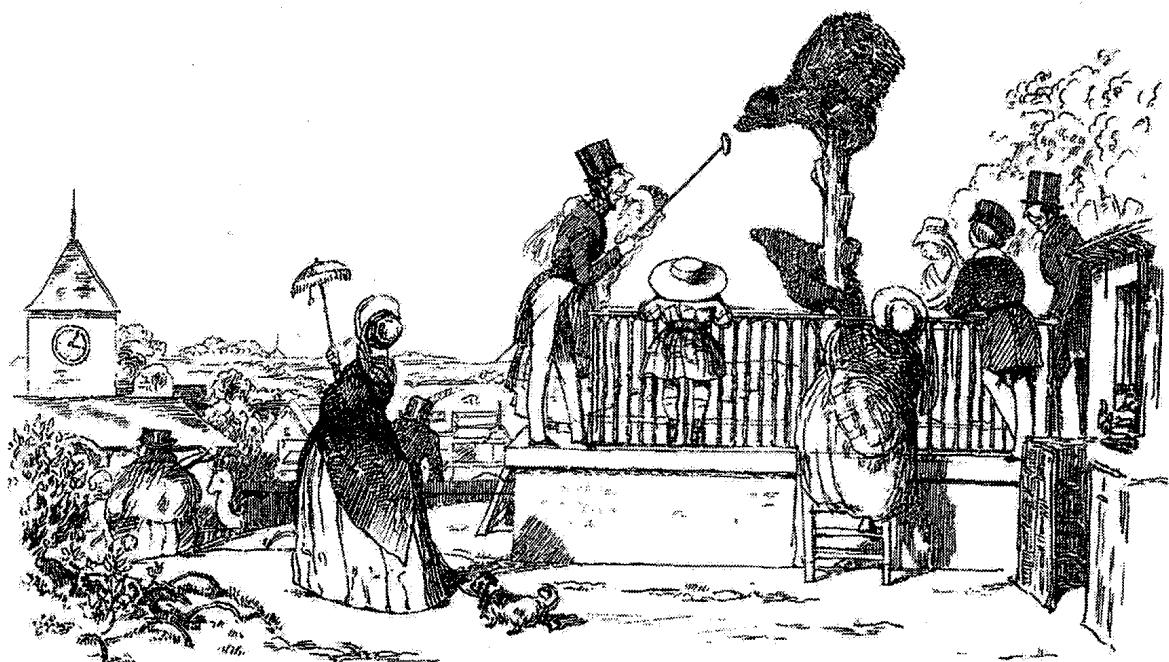


図6：ドイルの絵日記より「ベア・ピット」

出典：R. Doyle, *Richard Doyle's Journal, 1840* (London, 1980), p. 115.

みる。子供のような表情だ。そのとき、ある考へが、ふと頭をよぎつた。もし、この檻がなかつたら、クマはわたしを食べているところだろうか。

ハントの心理描写やドイルの絵画表現が興味深いのは、このような見物客の心理を的確に把握したことだけではなく、それを可能にする第三者の視点を彼らがもつていたことである。そのことを明示するかのように、ドイルは群衆を観察する自分の姿を場面に潜り込ませている（前景左側の後ろ向きの少年）。熊の餌やりの場面を描いたスケッチでも、ドイルは餌をあたえる見物客を観察する位置に自分を描いている（図六）。このような視点を得ていたことは、のちに風刺画家として開花するドイルの才能の一端をあらわしている。

「幸福な家族」は、人間がいかに動物を支配することに成功したかを示す見世物だったのだろうか。たしかに、そう理解することは、都市化・工業化が進行するイギリス社会において、人間が動物を経済的、社会的な資源として積極的に活用するようになり、自然界に対する影響力を強めていったという議論とも合致する。⁽³⁰⁾そのため、「幸福な家族」は人間の優位性を象徴的に示した見世物

と解釈されるかもしれない。しかし、当時の人々の視点に立ち、彼らが「幸福な家族」を実際どのように観察したのかを、メナジエリや動物園での経験と比較しながら分析していくと、そこにはもっと曖昧で複雑な動物観がみえてくるのである。動物を支配することができるという認識は、動物の凶暴性がいつ牙を剥くかも知れないという不安を伴っていた。メナジエリでは、殺傷事件は稀なことではなかつた。こうした現実が喚起する想像、もし檻がなかつたら、もし突然凶暴になつたらという想像が、メナジエリやサー・カスの魅力の源泉だとすれば、「幸福な家族」は、その想像を利用して、もし獰猛な動物が従順になつたらという想像を具象化し、一枚の肖像画のように展示したのである。「幸福な家族」が露にしたのは、動物は人間に支配されるべきものだという単純な動物観ではない。それよりも、はるかにニュアンスに富んだ、自信と不安、憧憬と恐怖とが織り交ざる動物観だつたのである。

第二節 骨相学と人間の「自己」認識

「幸福な家族」に映し出されたのは、複雑に錯綜する動物観だけではない。そこには、動物を比較対象とした

人間の自己認識も投影されているのである。ここでは、人間の精神活動を科学的に分析することを標榜し、当時のイギリス社会を席捲した「骨相学」に着目することで、「幸福な家族」に投影された人間の自己認識を考察したい。イングランド南西部に位置するサマセットに、ウィリアム・ベイカーという自然史研究者がいた。ベイカーはサマセット自然史・考古学協会の副理事長を務める一方、カキの養殖を研究した晩年のハンフリー・デイヴィーの貴重な情報提供者として活躍した。⁽³¹⁾また、サマセットの中心都市ブリッジウォーターナーに現れた「歌舞伎」と称される見世物に興味を抱き、ネズミが「歌舞」仕組みを解説するため、著名な地質学者のウイリアム・バックランドとの書簡を通じて、動物学・比較解剖学の権威であるリチャード・オーエンの見解を尋ねている。⁽³²⁾

一八三三年、このベイカーの息子たちはさまざまな動物を育て、自分たちの「幸福な家族」をつくろうと試みた。自然史が流行した一八三〇年代以降、子供の感受性を豊かにし、客観的な観察能力を育むために、身の回りにある草花や小動物を教材にすることが推奨された。⁽³³⁾自然観察や標本収集が子供にとって有益な活動であるとみなされ、学校教育、家庭教育に活用されたのである。したがって、ベイカーの子供たちが小動物を収集し、それを利用して「幸福な家族」をつくるうとしたのは変わることではない。むしろ、彼らほどの規模ではないにしろ、複数の動物を収集したり、飼育したりすることが、子供の楽しみのひとつだったことを示唆している。⁽³⁴⁾

ベイカーの子供が飼育した「幸福な家族」の構成員は、モリフクロウ、シロフクロウ、チヨウゲンボウ、カワラバト、チャボであり、さらに小ウサギが加わることもあつた。はじめ、同じ部屋に入れられた動物は互いに傷つけることなく暮らしていた。しかし、それまで別に飼育されていたカササギを加えると、カササギはモリフクロウの尻尾を引っ張つたり、けたたましく鳴いたりして、モリフクロウにちよつかいを出していくが、ある晩、カササギはそのモリフクロウに殺されてしまった。翌々日、モリフクロウはさらにハトを殺して餌にした。危険を察知した子供は一度モリフクロウを「幸福な家族」から離したが、しばらくして元に戻されたモリフクロウは、数日後にシロフクロウを殺してしまった。夜行性のフクロウは、「幸福な家族」の興行師にとつても細心の注意を要した動物である。ロンドンのオースティンは、見物客が訪れる昼間にかぎり、フクロウをハトやネズミと

じケージに入れていた。夜間は他の動物の安全を確保するため、フクロウは別のケージに入れて飼育したのである⁽³⁵⁾。このことをおそらく知らなかつたベイカー家では、カササギのちよつかいを契機にモリフクロウが他の動物を襲うようになつたことで、「幸福な家族」が崩壊してしまつたのである。

その記録は、ベイカーと交流のある骨相学者の強い関心を引いた。この人物によれば、動物の凶暴性がどのように発現するのかという問題を論じるのに、「幸福な家族」は格好の素材を提供するといふのである。そして、機会があれば、エディンバラ骨相学協会で「幸福な家族」に関連する論文を発表するとベイカーに伝えた⁽³⁶⁾。

ところで、骨相学とは一八世紀後半にウイーンの外科医フランツ・ガルが提唱し、一九世紀イギリス社会に広まつた、脳の構造と精神活動に関する理論である⁽³⁷⁾。骨相学の理論によれば、言語、芸術、哲学など人間のさまざま精神活動は、各々の活動に対応する脳の器官によつて司られており、器官の大きさは、それが担う活動能力の高さを示した。たとえば、前頭部にある「慈善官」(他者に対する愛情と善行を司る器官)が発達している人物は、博愛の精神に富んだ人物と鑑定された。脳はこ

うした種々の器官の集まりなので、頭蓋骨を分析することでその人物の性格や能力を鑑定できると考えられたのである。たとえば、とくに骨相学が流行した一八二〇年代から一八四〇年代にかけては、多くの町で骨相学協会が設立され、雇用者が従業員採用予定者の人物鑑定を地元の骨相学者に依頼することが多くあつた。あのチャーチルズ・ダーウィンも、ビーグル号のフィッツロイ船長と対面したとき、鼻の形から「十分堅固な性格ではない」と判断している⁽³⁸⁾。顔の骨格的特徴から個人の知性や性質を読み解くことができるという理論は、今日では「疑似科学」とされるが、その頃のイギリス社会では幅広く受け入れられていたのである。

このような骨相学の展開において、動物を比較対象とした研究には、ふたつの問題意識があつた。ひとつは、人間が動物より高度な精神能力をもつことを科学的に説明すること、もうひとつは、動物を比較対象としながら、人間の複雑な脳の器官を明らかにすることである⁽³⁹⁾。たとえば、飼い主を認識する知性や愛情を求める感受性が一部の動物に備わつており、従順性と知性の高さは、大脳の発達度合に比例すると主張された。もちろん、動物の道徳性や知性を科学的に論じようとしたのは、骨相学が

初めてではない。動物学者のウイリアム・ロレンスは、『ヒトの生理学、動物学、および自然史に関する講義』（一八一九年）において、比較解剖学の見地から、「器官と知性は、「人間を頂点とし」サル、イヌ、ゾウ、ウマ、他の四足獸、鳥類、爬虫類、魚類、下等動物へと暫時的に変化していく」と論じている。⁽⁴⁰⁾これらの見解が骨相学研究にも引き継がれ、動物の精神活動は骨相学の研究テーマになったのである。それゆえ、骨相学の中心的課題は人間の精神の物質的解明にありながら、動物に感情があることを科学的に裏付けるという側面ももつていた。

ベイカー家の「幸福な家族」の顛末を聞いた骨相学者は、動物がどのような環境に置かれると凶暴化するのかという観点から、「破壊官」の働きを分析しようとしたりう。「破壊官」は人間の脳の場合、耳の上に位置し、不快なものや有害なものを破壊する欲求を司ると信じられた。そして、「破壊官」の濫用は残忍、激怒、復讐という性質や行動を導き、「格闘官」とともに作用するなど、傷害や殺人に發展する可能性があると考えられた。逆に「破壊官」の作用が欠けると、破壊しなければならない有害物を破壊する能力が失われるというのである。⁽⁴¹⁾このような見地に立てば、「幸福な家族」は、人間の脳

の働きを明らかにするための、恰好の実験材料ということがある。動物の器官は人間ほど複雑ではないため分析が容易であるばかりか、人為的に動物の生息環境を調節することで、環境が動物におよぼす影響を觀察できるからである。言いかえれば、「幸福な家族」には、人間の性質がより単純なかたちであらわれていると考えられるのである。

第三節 教育と意志の力

ここで議論を一度、冒頭で紹介したオースティンの「幸福な家族」の絵に戻したい。この絵は、実はロンドンの出版者チャールズ・ナイトが、自ら著した『メナジエリ』（一八二九年）の挿絵として用意したものである。『メナジエリ』は、ナイトを編者者として有用知識普及協会から刊行された「面白知識文庫」の初巻にあたる。有用知識普及協会は、廉価な出版物の普及による労働者教育の推進を目的に、ホウイッグの有力議員、社会改良主義者、知識人が一八二五年に設立した任意団体である。具体的には、最新の製紙技術と印刷技術を駆使して『ペニー・マガジン』や『ペニー・百科事典』といった出版物を大量生産し、労働者・中流下層階級を中心とする読

者層に提供したのである。⁽⁴²⁾ 一連の出版事業に携わったナイトは、出身地のウインザーで救貧行政に携わった経験から、教育の普及こそ、貧しい労働者が生活環境を改善するためには不可欠だと信じていた。そのナイトは、『メナジエリ』において「幸福な家族」を次のように解説している。

弱者を捕食しようとする獰猛な本能が作動することは決してない。その本能はそれをまさる整然とした穏やかさに包まれているからである。この飼育環境は動物の優しい性質を育むのに適している。「中略」「幸福な家族」は、賢明な飼育管理によつて行動を習慣づけ、その習慣の力によつて規範を確立することができることを示した、説得力のある実例である。この原則は子供にも同じようにあてはまる。

ナイトは『メナジエリ』のために一二名の画家・版画家を雇い、七七点の挿絵を用意した。費用は「面白知識文庫」の平均的な執筆原稿料を上回る一一七ポンドであり、そのなかで「幸福な家族」の挿絵には一三ポンド（版下に六ポンド、版画に七ポンド）と最も費用をかけた。⁽⁴³⁾ そ

の意図は、読者が実際に「幸福な家族」を見物しているかのような臨場感を伝えることだけではない。調和と平安のなかで暮らす動物の姿を寓意として、教育を通じた社会的美德の涵養を読者に訴えようとしたのである。

ナイトは「賢明な飼育管理」によつて「獰猛な本能」が抑制されると説明した。その説明に骨相学の影響を読み取ることができると、ウースターにおいて教育の普及に尽力した医師エドワード・ターリーには、その影響がより明白にあらわれている。ターリーはコレラや結核などの感染症について著作を残したほか、ロンドン骨相学協会に加わり、効率的な教育を実践するために骨相学の知識が有用であることを説いた。⁽⁴⁴⁾ 一八三四年、ウースター芸科学協会において、ターリーによる骨相学に関する講演が二期にわたり行われた。講演のテーマは、身体の発育や人格形成を骨相学の最新成果から解説し、学習活動において骨相学の知識を活用するよう促すことだった。一期目の講演は「人間と下等動物の神経系に関する講義」として自然史専門誌『アナリスト』に収録され、二期目の講演は『教育の最初の指針』としてウースター文芸科学協会から出版された。これらの記録によると、ターリーの見解は次のようにまとめられる。脳は精神の器官であ

り、人間の知的能力と道徳感情を育む。人間に生来的に備わる動物的感情は、過剰に行使されれば本人を傷つけることになるため、脳がその働きを抑制している。つまり、道徳的な感情を司る部分の効果を増すことで、人間の脳の大半を占めている動物的感情の働きを抑制しているのである。⁽⁴⁶⁾ 教育は、この道徳的な感情を司る器官の効果を増すために不可欠である。脳の各器官を統制する意志は、教育を通じて、法、道徳、信仰、博愛精神などの影響を受けるようになるからである。仮に、こうした規範や理念が人間の意思にまったく影響をあたえないとしたら、その人間は殺人鬼になりかねないというのである。

動物的感情を抑制した成功例としてターリーが挙げる動物は、ニワトリを襲わないように躊躇られたネコ、主人の獲物には手をつけない狛犬、メナジエリで踊りを披露するクマ、調教師に頭を差し出されてもじつとしているライオンである。とくに、ライオンの見世物に関しては次のように説明した。「見物客の好奇心を満たす恐怖を演出し、最も野蛮な獣に対する教育の勝利を証明するため、飼育係が恐れもせずに安んじて差し出す己の頭を、ライオンは大きく開口して招き入れる」。⁽⁴⁷⁾ 調教された動物が教育の効果を示すというターリーの説明は、ナイトの

「幸福な家族」についての解説と重なり合う。子供たちの育てた「幸福な家族」が一度崩壊するところをみたベイカーも、「調教は動物の習慣を美しいまでにかえるが、長い間抑えられていた自然の習慣は、ひとたび元に戻ると、ふたたび動物を支配してしまうようである」と記録している。調教、あるいは教育が、動物や人間の性質をどれだけ変えることができるのかに、関心が寄せられたのである。⁽⁴⁸⁾

「幸福な家族」やサーラカスなどの動物の見世物に、教育普及のメッセージを読み込もうとしたのは、ナイトやターリーだけではない。一八四〇年代、有用知識普及協会はオースティンに国内各地の産業都市をまわり、現地の職工学校で開催される展示会において、「幸福な家族」を披露するよう要請した。仲介役はナイトだった可能性が高い。ナイトが『メナジエリ』のために作成した挿絵が、オースティンの「幸福な家族」の広告ビラに用いられているため、両者に何らかの接点があったのは確かである。いざれにせよ、オースティンは総勢二〇〇「名」からなる「幸福な家族」を引き連れ、マンチエスター、リヴァプール、リーズ、シェフィールドなどにある職工学校の展示会に参加し、人気を博した。たとえば、マンチ

エスタ職工学校の展示会のときの様子は、次のように描写されている。⁽⁴⁹⁾

元気はつらつの三匹の猿は、いつ見ても面白い。猫の面倒をみたり、ネズミを可愛がったり、イタチを摇すつたりしている。「中略」ホロホロ鳥、鴨、兎、モルモット、ハリネズミ、それ以外にもたくさんの動物が、それぞれ楽しみを見つけ、友達とも仲良くしているよううに見える。

標本も展示された。大がかりな視覚的装置を用いることで、工業化の進展と地元産業の発展を賛美することだけではなく、労働者の興味を引きつけ、知識や道徳心を高めるという狙いがあった。労働者教育の推進を標榜する有用知識普及協会が、このような場所に「幸福な家族」を誘致したのは、展示会に多数の見物客を集めるためだけではなく、労働者教育の重要性を訴えるのに適していたからである。

職工学校とは、職人や熟練工を対象とした成人教育の普及を目指して各都市に相次いで設立された任意団体の教育機関である。そこでは、読み書き算盤だけでなく、幾何学や地理学から文学、歴史、自然史まで幅広い分野に関する教育が施された。このように、各地の職工学校は出版事業を担う有用知識協会と連携し、公教育の整備が始まる以前の一九世紀前半において、成人教育の拡充に一定の貢献を果たしていた。⁽⁵⁰⁾ その職工学校で行われた展示会とは、小規模な博覧会のようなもので、世紀後半の博覧会事業にも影響をあたえたと考えられている。⁽⁵¹⁾ 展示会では工業品のほかに、絵画や彫刻、動植物と鉱物の

やニューラナークに学校を開いたロバート・オーエンののような社会改良主義者もいれば、相互改良協会などの自発的な知的サークルを結成した労働者たちもいた。⁽⁵²⁾たとえば、シェフィールド職工学校の副理事長を務めたクリストファー・トムソンは、自己の半生を記した『ある職人の自伝』の中で、「独立独歩の精神が欠如していっては、いくら安楽な生活を求めてても無駄である。しかし、労働者階級はその精神を欠いており、議会の援助、地元の公益団体、ワークハウスにすべてを委ねている」と述べた。⁽⁵³⁾トムソンは、教育による知識と道徳の向上こそ、労働者階級がその独立独歩の精神をもつて前進するのに不可欠だと考えていた。それゆえ、仲間の労働者を鼓舞しようと、苦境を乗り越え、独学を続けてきた自分の記録を出版したのである。トムソンは、次々と新しい学校が誕生している状況に言及し、「われわれは新しい時代の夜明けを生きている」と明言した。⁽⁵⁴⁾骨相学はこのような進歩主義的な考え方を科学的に裏付ける役割を果たした。それは、骨相学が、ある人間がどのような能力や性質を備えるかは、予測不可能な偶然性の問題ではなく、分析により予測可能だという立場をとったからである。⁽⁵⁵⁾このような文脈において、「幸福な家族」には、たんな

る珍奇な見世物以上の意味が込められた。それは、科学的理論に支えられた進歩主義の人間観を、教育の普及に対する期待とともに映し出す鏡だったのである。

第四節 変容する「幸福な家族」の肖像

有用知識普及協会が企画した地方巡業と前後して、オースティンにロンドン動物園で「幸福な家族」を公開しないかという斡旋があった。斡旋を試みたのは動物園の運営母体であるロンドン動物学協会の会員で古事物研究者のジョン・ブリトンである。一八四〇年代になると、ひと頃の人気に陰りがでた動物園は、入場者数の減少に歯止めがかからず、赤字経営に陥ろうとしていた。⁽⁵⁶⁾ウエストミンスター橋でオースティンの「幸福な家族」を見物して感銘を受けたブリトンは、この見世物が動物園の人気を取り戻してくれると期待し、動物園に迎え入れることを提案した。もちろん、集客力だけでなく、教育的な価値もあると判断した。世間の大きな注目を集めたとはいえ一介の民間興行にすぎなかつた「幸福な家族」が、ロンドン動物学協会という大きな後ろ盾を得て、動物園と融合する可能性が開かれたのである。しかし、動物学協会の理事会はブリトンの提案を拒否した。ブリトンは

その原因を協会内の派閥抗争に求めたが、理事会には「幸福な家族」を受け入れられない理由が存在した。⁽⁵⁷⁾その後、ロンドン動物園で起きた事件から、その理由に迫ることができる。

一八五二年一〇月一一〇日、ロンドン動物園の飼育係がコブラに毒殺された。飼育係はその前夜、オーストラリアへ移民する友人の歓送会で酒を飲み、未明に動物園に帰ってきた。そして、ヘビの展示室に入り、コブラを取り出して、首に巻きつけたところ、そのコブラに噛まれたのである。動物園では二年前、「アラブの蛇使い」という見世物が行われ、センセーションを巻き起こした。⁽⁵⁸⁾大勢の見物客に交じつてそれを見た飼育係は、酔った勢いで蛇使いの真似をしようとした、鼻頭をコブラに噛まれたのである。飼育係はすぐにロンドン大学病院へと運ばれたが数時間後に死亡した。この出来事はすぐに、さまざまな新聞・雑誌で大々的に報道された。⁽⁶⁰⁾そのため、展示環境に危険はないことを動物学協会は訴えなければならなかつた。⁽⁶¹⁾検死法廷では、事故の原因は酩酊状態だった飼育係の過失であるという動物学協会の見解が受け入れられた。労働者の飲酒習慣は社会問題であると捉えられ、中産階級を中心とした禁酒・節酒運動が起きていた。

禁酒運動支持者の見方に従えば、死亡した飼育係は典型的な飲酒文化の犠牲者だったのである。⁽⁶²⁾

事件後、『家庭の言葉』の編集者であるチャールズ・ディケンズは、動物学協会の有力会員であるリチャード・オーエンにコブラをテーマにした読み物を寄稿するよう依頼した。事件の詳細を知っていたオーエンは、ディケンズの依頼を快諾し、短い読み物を書いた。⁽⁶³⁾オーエンは動物園の死亡事故に触れ、「簡単に酒に溺れてしまう日雇い労働者たちが迎える、幾多の結末のうちのひとつ」であると論じた。オーエンの説明は、労働者の飲酒文化を問題視する中産階級の読者の好みを満足させるだけではなく、動物園に落ち度はなかつたことを再度確認するものだつた。しかし、動物園の展示方法が安全であることを繰り返し説明することは、見物客が依然として不安を抱いていることの裏返しでもある。実際に、オーエンは奇妙な噂が街に流れていることを知っていた。それは、動物園のヘビは「幸福な家族」と同じように大きなひとつのケースに入れられており、飼育係はその中に入り普段通り働いているところを、覚醒したコブラに襲われたという噂である。オーエンは、そのような根も葉もない噂を信じないよう読者を諭した。⁽⁶⁴⁾

「幸福な家族」と同じイメージを抱かれるることは、動物園の運営者を脅かすものだった。なぜなら、動物園は他のさまざまな動物の見世物との差異化をはかりながら、発展してきたからである。そもそも、ロンドン動物学協会が掲げた動物園建設の目的のひとつには、科学的な研究の支援があった。さらに、屋外の広い飼育環境をつくりだすことで、動物たちが生き生きと暮らす様子を演出したこと、従来のメナジエリやサークスにはない新しい魅力であり、その魅力が科学的研究の推進を掲げる動物学協会の主張に説得力をもたらしたのである。⁽⁶⁵⁾したがって、ロンドン動物園は過度に商業化することを避けなければならなかつた。とくに開園初期は、商業化路線を歩んだサリー動物園とは対照的に、動物学とは直接関係のないアトラクションを導入することを注意深く避けていた。⁽⁶⁶⁾本質的には営利目的の見世物である「幸福な家族」と同等のイメージをもたれることを、ロンドン動物園は避けなければならなかつたのである。

たしかに、一八五〇年代以降、蛇使いの見世物を行うなど、動物園は新たに任命された動物学協会幹事のもとで商業化路線に舵を切り、さまざまなアトラクションを取り入れるようなつた。⁽⁶⁷⁾しかし、そのような変化を考慮

しても、動物園はやはり「幸福な家族」を取り込むことはできなかつたと考えられる。動物園が積極的に導入したのは、一時的な見世物やゾウ乗りなどのアトラクションであり、それはあくまで「動物学のアミューズメント・パーク」としての動物園を補完するアーニティにすぎなかつた。しかし、「幸福な家族」は、それ自身完成された、自己完結した展示だつた。「幸福な家族」は、ロンドンの街並みの一部に溶け込んでいただけでなく、教育普及のメッセージを発したり、骨相学的な動物観を触発したりするなど、分離が徐々に進みつつある「専門科学」と営利目的の「商業科学」との狭間で独自のニッチを切り開いていた。⁽⁶⁸⁾その個性ゆえに、「幸福な家族」は動物園と融合することができなかつたのである。

オースティンが引退したあとも、「幸福な家族」の活況は続いたようだ。フランシス・バックランドの『自然史よもやま話』（一八五八年）は、オースティンの後継者とピカデリーに居を構えた興行師が、それぞれに自分の「幸福な家族」のほうこそ元祖であると主張し、人気を集めていることを記録している。一般読者向けの読み物を書いていたバックランドにとって、こうした興行師は動物に関する興味深い話を提供してくれる貴重な情報

源だった⁽⁶⁹⁾。しかし、しばらくして、「幸福な家族」はロンドンから消えてしまったようである。一八七一年、子供向けの雑誌『子供たち』に掲載された「幸福な家族」と題する読み物では、著者が次のように記している。「ロンドン子なら、つい最近まで『幸福な家族』と呼ばれていた見世物を見物したり、あるいはそれについて聞いたりしたことがあるだろう。しかし、『子供たち』の読者には、地方に住む子供や、外国に住む子供もいるので、この『幸福な家族』が何かを説明する必要があるだろう」。そして、その説明のあと、この著者は別の「幸福な家族」について話を続けている。それは、ある家庭で仲良く暮らすイヌ、ネコ、ウサギなどのペットたちのエピソードである。⁽⁷⁰⁾

ロンドンの街角に存在した「幸福な家族」から、ペットたちの「幸福な家族」へと話題が移るこの読み物は、「幸福な家族」の意味の変容を象徴的に示している。とともに、「幸福な家族」は、オースティンが始めた特定の見世物を想起させる言葉だつた。しかし、その見世物がロンドンの街角から消滅したため、本来の指示対象を失つた「幸福な家族」という言葉は、中産階級的な家庭生活の文脈のなかで捉え直されるようになつた。福音派

出版物は、聖書の教えに従つて幸せに暮らす家族を「幸福な家族」と呼ぶことがあり、そうした調和的な家庭生活の意味に「幸福な家族」が引き寄せられていつたのである。実際に、子供向けの雑誌を調査すると、中産階級家庭の愛玩動物を「幸福な家族」と名付けて描く絵や物語が、一八七〇年代以降散見されるようになる（図七、図一〇）。そうした絵や物語では、しばしば「幸福な家族」に読み込まれた教育普及のメッセージや、骨相学理論の側面は完全に欠落している。ここでは、（種としての）動物の凶暴性を調教によって抑制するのではなく、（種ではなく個体としての）動物それぞれに備わる独特な習性を、そのまま調和させることによって「幸福な家族」が成立すると考えられた。個々の動物の性格は人為的な調教では本質的に変わらず、もし特定の動物間に親和性がみられるとしたら、それは調教の結果というより、創造主がもともと動物にそのような性格をあたえたからだと読み替えられるようになつた。「幸福な家族」は、もはやロンドンの街角に実在する見世物ではなく、敬虔な中産階級家庭の日常を想起させる枕詞として用いられるようになつたのである。

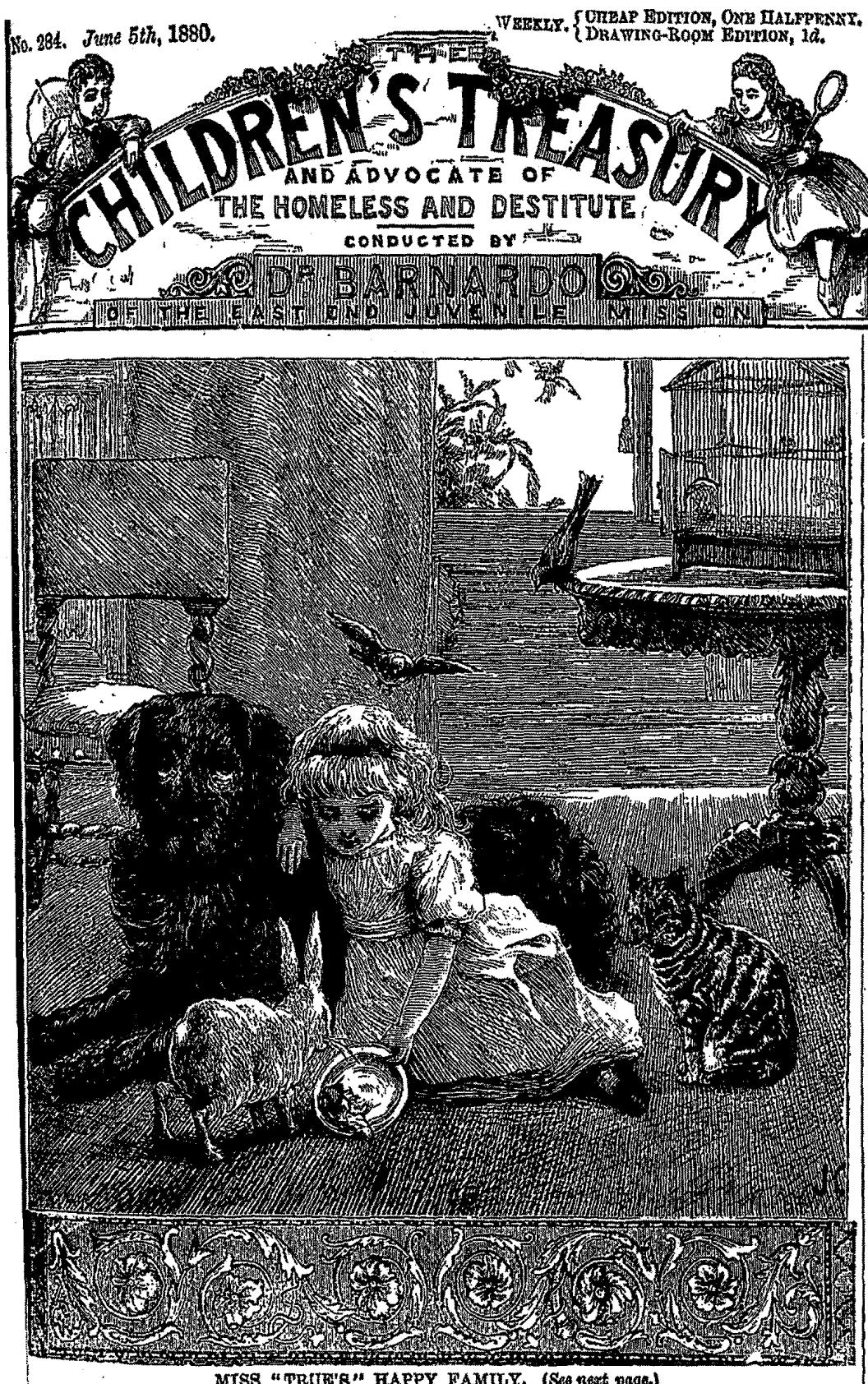
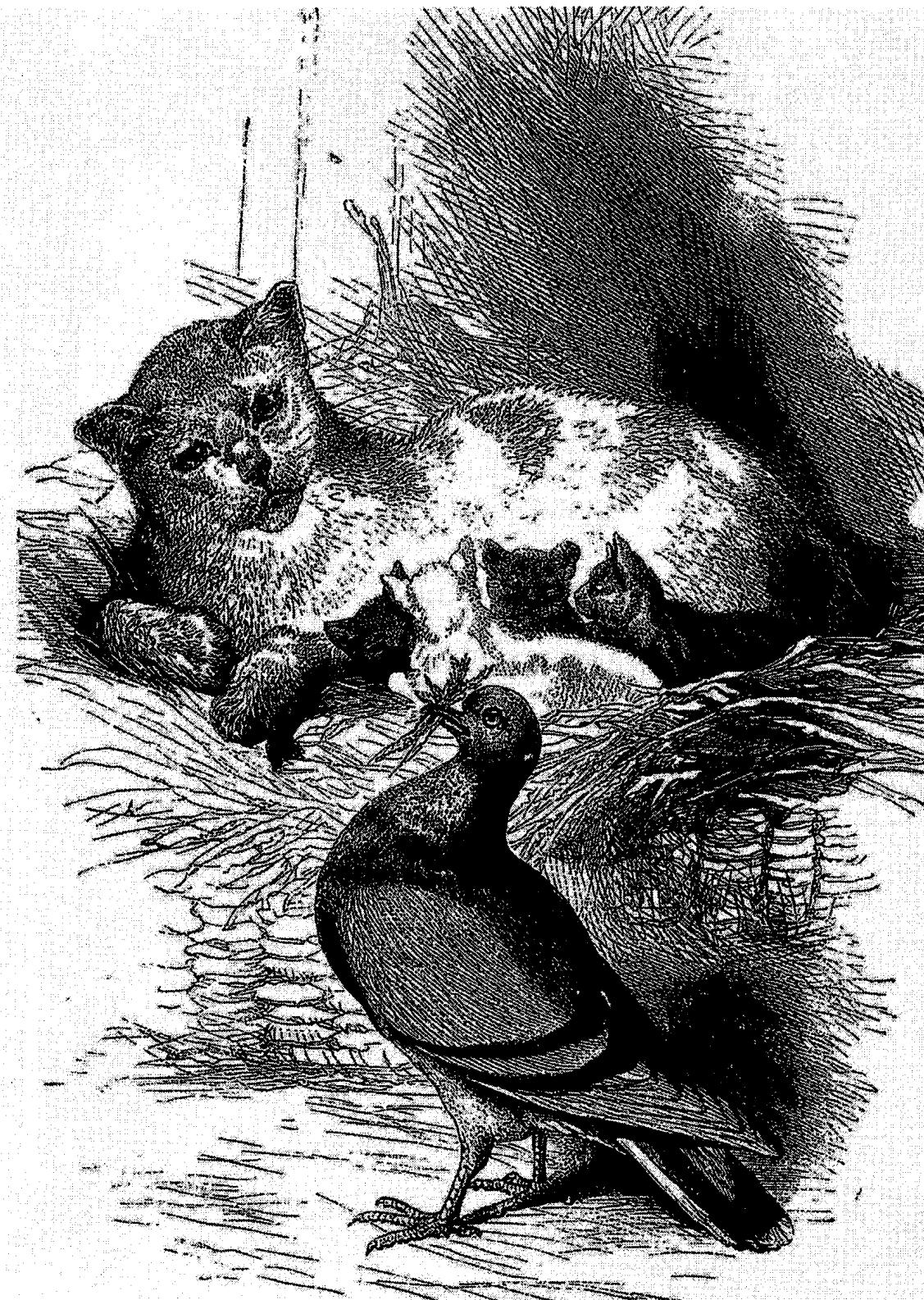


図7：変容する「幸福な家族」の肖像
出典：Children's Treasury, 5 June, 1880, p. 226.



図8：「驚くべき家族」

出典：*Chatter Box*, 19 Oct. 1877, p. 376.



"PIE-JOHN" AS "POPPETY'S" ATTENDANT.

図9：猫の世話をする鳩

出典：*Children's Friend*, 1 July 1873, p. 101.



図10：鏡の自分にみとれる鳩

出典：*Children's Treasury*, 1 Aug. 1873, p. 119.

おわりに

最後に、「幸福な家族」の出現から消滅までの半世紀を再度辿ることによつて、「動物史」の視点からロンドンの都市空間の構造的な変容を捉え直してみたい。一九世紀を通して、動物の見世物の多様なあり方は、大きく変化していく。オースティンの「幸福な家族」が脚光を浴びるようになつた一八二〇年代後半、エクセター・チエインジ・メナジエリは、「首都改良計画」と呼ばれる市街地の再開発のために解体された。そのため、興行主のエドワード・クロスは、テムズ河の南岸にあるヴォクソール・ガーデンの隣接地に移転し、サリー動物園を開園した。一八三五年、ロンドン塔のメナジエリも閉鎖され、そのコレクションは、一八二八年に開園して間もないロンドン動物園に引き渡された。ウォンベル・メナジエリも、その興行主であるジョージ・ウォンベル⁷³が一八五〇年に死去すると、大幅に規模が縮小された。そして、一八五五年、スマスフィールドの家畜取引場がイズリントンへ移転し、バーソロミュー・フェアはこの年を最後に廃止された。一八六〇年代に入ると、スマスフィールド市場は精肉のみの取引となり、一八六八年には、市

場まで敷き込まれた鉄道の上にアーチ状に建物が建設され、取引場の屋内化が完成した。スマスフィールド市場で動物を見物するという習慣が、完全に消滅したのである。このように、動物が見世物として公開される場所が、ロンドンの中心部から徐々に消えてゆき、市街地と郊外との境界上に誕生した二つの動物園に限られていったのである。見世物としての動物が、新しく現れた動物園という空間に集約される過程で、「幸福な家族」はロンドン塔メナジエリが解体され、バーソロミュー・フェアが廃止されたあとも、しばらくの間存続した。

「幸福な家族」が比較的長く残つた理由はいくつか考えられる。最初に、動物の見世物としての特殊性がある。「幸福な家族」は、動物に備わると考えられた凶暴性と従順性との対照を利用し、見物客が本来はあり得ないと想い込んでいた動物の姿を演出した。ネコがネズミを慈しみ、ハトとウサギが遊んでいる姿を見て楽しむ見物客は、頭のどこかで、眼前の動物が突如凶暴になつたらどうなるのだろうかと想像したはずである。その想像もまた楽しみのひとつだった。こうした心理的効果は、大型肉食獣の給餌が人気を呼んだ動物園や、ライオン使いのパフォーマンスが見物客を興奮させたサークัสやメナジ

エリにも仕組まれていた。こうした場所での経験があるからこそ、「幸福な家族」を見物する際にも、見物客の意識は動物の凶暴性と従順性との関係に向かつたのである。「幸福な家族」は、メナジエリや動物園が見物客にあたえる心理的効果を利用しながら、調教された動物の性質を強調した。冒頭で紹介した図像には、まさにこの調教された動物の性質が映し出されている。しかし、それと表裏一体の関係にある動物の凶暴性も、想像力を働かせて「幸福な家族」を眺める見物客の目に映つていたのである。

次に、「幸福な家族」が一時のセンセーショナルな見世物に終わらず、都市空間の中に定着した理由には、規模がそれほど大きくななく、機動性に優れた見世物だったという点もある。一八二〇年代後半、ロンドンの再開発計画により、エクセター・チキンジ・メナジエリは解体に追い込まれたが、それと前後してウェストミンスター橋に現れたオースティンの「幸福な家族」は、ロンドンの長期的な空間構造の変化に適応することができた。また、ザザーク橋に移動したり、地方巡業に出たりしたことなどが、「マンネリ」を避け、人気維持につながったと考えられる。オースティンに対抗してピカデリーを拠点

とした別の興行主も、国立美術館や応用地質学博物館までのアクセスが容易で、労働者の往来が激しいというピカデリーの地理的特性を利用しようと目論んだはずである。こうした地理的・空間的な適応力が、「幸福な家族」を見世物ジャンルの定番として位置づけることに寄与したのである。

さらに、公権力による規制の対象にならなかつたことでも、「幸福な家族」の存続理由にあげられる。たとえば、バーソロミュー・フェアは、さまざまな人気見世物を集めつつも、悪習と犯罪の苗床として当局から警戒され、結果的には廃止されることになり、ウォンベル・メナジエリなどの大規模な移動式メナジエリは、大きな興行機会を失つてしまつた。バーソロミュー・フェアの廃止は、公権力の統制、興行主の自主規制、公衆の秩序意識等により、娯楽が提供される公共空間にさまざまな規範の網がかけられていく変化を示していた。⁽⁷⁴⁾しかし、「幸福な家族」はそうした規範の網に絡め取られずにするんだのである。「幸福な家族」は、必ずしも「リスクペクタブル」な人々のみを対象とした見世物だったわけではないが、動物虐待防止協会の批判を呼んでいた熊掛けや牛掛けなど「動物いじめ」とは、一線を画す見世物だったことは

確かにである。「幸福な家族」に教育普及のメッセージや骨相学理論との関連性を読み込もうとする見方や、「幸福な家族」が各地の職工学校で公開された事実からは、「幸福な家族」に一定の公益性が認められていたことがわかる。余暇文化に関しては、一九世紀以降、「リスクタブル」な人々の娯楽とそうでない人々の娯楽との二極分化が排他的に進行したことが指摘されている。⁽⁷⁵⁾ヴィクトリア女王から市井の人々まで楽しんだ「幸福な家族」は、ちょうど両者の狭間に位置する娯楽ジャンルだつたと言えるかもしれない。あるいは、そうした二項対立的な枠組みを留保し、個々の娯楽ジャンルの流動性と多面性を包括する総合的な枠組みが求められるのかもしれないが、この点については、今後の課題としたい。

一八七一年九月、『パンチ』に次のような広告が掲載された。⁽⁷⁶⁾

投資事業

若い三匹のバイソン、同じく若い三匹のジャコウネコ、二歳三ヶ月の赤ちゃんワニ、およびワシミニズクを販売中。申込は、○×△まで。

ひと山あてのチャンスを見逃すな。進取の気性に富んだ投資家、儲かる見世物を探している投資家であれば、この動物たち入手するのに費用を惜しんだりはしないだろう。一通り訓練をすれば、動物がみんな一緒に暮らしているところを「新・幸福な家族」として公開することができます。赤ちゃんワニも、赤ちゃんのままでしておくことができれば、それだけで立派な資産である。時間を決めて鳴くように赤ちゃんワニを躊躇されれば、見世物の成功はもはや疑いようのないものになるだろう。

もちろん、この広告は架空のものだが、この頃ロンドンから消滅した「幸福な家族」と関連があるのは明らかである。変わりゆくロンドンの街並みの隅々に目を向けていた『パンチ』らしい、存続への淡い期待を捨てきれず贈られた、「幸福な家族」へのフェアウェルなのかもしれない。

附

本稿は平成110年度科学研究費補助金（特別研究奨励費）による研究成果の一端である。

- (1) C. Knight, *The menagerie* (London, 1829), p. 19; Bodleian Library, John Johnson Collection, Animals on Show.
- (2) *The Times*, 15 Aug. 1842.
- (3) K. Thomas, *Man and the natural world* (London, 1983).
- (4) R. Perren, 'The meat and livestock trade in Britain, 1850-70', *Economic history review*, new ser., 28 (1985), pp. 385-400.
- (5) H. Kean, *Animal rights: political and social change in Britain since 1800* (London, 1998); D. Donald, 'Beastly sights: the treatment of animals as a moral theme in representations of London, c. 1820-50', *Art history*, 22 (1999), pp. 514-544.
- (6) E. T. Bennett, *The Tower Menagerie* (London, 1829); D. Hahn, *The Tower Menagerie: being the amazing true story of the royal collection of wild and ferocious beasts* (London, 2003).
- (7) E. Cross, *Companion to the royal menagerie, Exeter Change* (London, 1820).
- (8) *Morning chronicle*, 8 Sept. 1828; *Preston chronicle*, 26 May 1832.
- (9) A. Wynter, 'The Zoological Gardens', *Quarterly review*, Dec. 1855, pp. 246-247
- (10) たしかば、チャールズ・チャーチンズが『家庭の図鑑』に掲載した「幸福な家族のカラスより」をこゝへ読み物は、読者が「幸福な家族」の現世物を知らざるゝ前提の上に書かれたものである。Household words, May 1850, pp. 156-158; June 1850, pp. 241-241; Aug. 1850, pp. 505-507.
- (11) E. Fudge, *Perceiving animals: humans and beasts in early modern English culture* (Chicago, 2002), pp. 1-10.
- (12) R.D. Altick, *The shows of London* (Cambridge, 1978), pp. 251-287, 306-307.
- (13) *London reader*, 5 Oct. 1865.
- (14) H. Ritvo, *Animal estate: the English and other creatures in the Victorian age* (Cambridge, Mass., 1987), pp. 226-228.
- (15) 記事は「ナッシュ・ヘイ・ヘンタツー」とNineteenth Century British Library Newspapersを使用した。
- (16) 一八二四年一月移転中のチャーチンズのメナジヤニラムの死後、マーティン・モーリーの「近隣住民因知り死」。Morning chronicle, 24 Feb. 1834.
- (17) *Liverpool mercury*, 15 Jan. 1830.
- (18) *Derby mercury*, 13 Oct. 1830.
- (19) *Ibid.*, 8 June 1831.
- (20) Anon, *Extracts from the diary and other manuscripts of the late Frederic James Post of Islington* (London, 1838), pp. 18-19.
- (21) 「ハニーハー・ハヤートがベーハルハドニームグラフの技法を紹介する。ハヤートは鐵筆終結後にベーハルハドニームグラフ化し、ロ

- (31) J. Bowen(ed.), *A brief memoir of the life and character of William Baker* (Taunton, 1854), pp. 86-91.

(32) British Library, Add. Ms. 35173, ff. 279-282.

(33) R. Patterson, *On the study of natural history as a branch of general education in schools and colleges* (Belfast, 1840); T.H. Huxley, *On the educational value of the natural history sciences* (London, 1854).

(34) *Round robin*, 1 Nov. 1872, pp. 821-830.

(35) Bentley's miscellany, Feb. 1844, p. 70.

(36) Bowen, *A brief memoir of the life and character of William Baker*, pp. 93-95.

(37) R. Cooter, *The cultural meaning of popular science: phrenology and the organisation of consent in nineteenth-century Britain* (Cambridge, 1984); J. van Wyhe, *Phrenology and the origins of Victorian scientific naturalism* (Aldershot, 2004).

(38) ブラム・モーニング・クロニクル（横浜開港場）『アーチャー・スコット・ターナー著』（翻印新譜社、一九九〇年）

(39) T. Sandwith, 'A comparative view of the relation between the development of the nervous system and the functions of animals', *Phrenological journal and miscellany*, 4 (1826-1827), pp. 479-494.

(40) W. Lawrence, *Lectures on physiology, zoology and the natural history of man delivered at the Royal College of Surgeons* (London, 1819), pp. 108-109; R. Cooter, *Phrenology*

(3) National Portrait Gallery Archive, Journal of George Scharf, 2 Feb. 1836.

(24) T. Ito, 'Between ideals, realities, and popular perceptions: an analysis of the multifaceted nature of London Zoo, 1828-1848', *Society and animals*, 14 (2006), pp. 161-163.

(25) T. Frost, *Circus life and circus celebrities* (London, 1875), pp. 262-275.

(26) *Morning chronicle*, 27 June 1827.

(27) C. Camden, 'The travelling menagerie', *Good words for the young*, Oct. 1872, pp. 543-546.

(28) J. H. Pollen (ed.), *A journal kept by Richard Doyle in the year 1840* (1885), p. 115.

(29) L. Hunt, 'A visit to the Zoological Gardens', *New monthly magazine*, Aug. 1836, p. 481.

(30) Ritvo, *Animal estate*, p. 220.

in the British Isles : an annotated, historical bibliography and index, p. 320.

- (41) H. Clarke, *Christian phrenology* (Dundee, 1835).
- (42) 亜根麗「トキニス・トニス・トニス・トニス」『アーヴィング』 著者名 1100年
- 1847), p. 24.
- (43) Knight, *The menageries*, p. 19.
- (44) University College London, SDUJ papers, no. 66, 'Illustrations', 1832.
- (45) Cooter, *Phrenology in the British Isles*, pp. 328-329.
- (46) E.A. Turley, *First lines of education : a course of four lectures delivered to the Literary and Scientific Institution, Worcester, in the spring session of 1839* (Worcester, 1839), pp. 38, 71.
- (47) E.A. Turley, 'Lecture on the nervous system of man and the inferior animals', *Analyst*, 3 (1836), pp. 312-317.
- (48) Bowen, *A brief memoir of the life and character of William Baker*, p. 93.
- (49) *Exhibition gazette*, Manchester, 1845, p.54, quoted in T. Kusamitsu, 'Great exhibitions before 1851', *History workshop journal*, 8 (1980), p. 81.
- (50) T. Kelly, *George Birkbeck : pioneer of adult education* (Liverpool, 1957).
- (51) Kusamitsu, 'Great Exhibitions before 1851', p. 87.
- (52) A. Desmond, *The politics of evolution : morphology, medicine, and reform in radical London* (Chicago, 1989);
- D. Vincent, *Bread, knowledge and freedom : a study of nineteenth-century working class autobiography* (London, 1981).
- (53) C. Thomson, *The autobiography of an artisan* (London, 1847), p. 24.
- (54) Ibid, p. 23.
- (55) Cooter, *The cultural meaning of popular science*, p. 181.
- (56) 亜根麗「トキニス・トニス・トニス・トニス」『アーヴィング』 著者名 1100年
- (57) *The Times*, 8 Sept. 1842.
- (58) Zoological Society of London Archive, Minutes of Council, vol. 10, ff. 306-307.
- (59) W.J. Broderip, *Leaves from the note book of a naturalist* (London, 1852), pp. 201-203.
- (60) Zoological Society of London Archive, Newspaper Cuttings, vol. 1, ff. 41-47.
- (61) Zoological Society of London Archive, Minutes of Council, vol. 10, ff. 310-314.
- (62) B. Harrison, *Drink and the Victorians : the temperance question in England, 1815-72* (London, 1971).
- (63) R. Owen, *Life of Richard Owen* (London, 1894) vol. 1, pp. 389-392.
- (64) *Household words*, 6 Nov. 1852, pp. 187-188. 著者名 1852
- 1852), p. 24.

(15) 伊東園史「歐觀美、樂園、ニギヤツツヤー——船市の廿

の動物園・一八二〇年之ロハシハ——」〔年報都市史研

究〕第一一号(1900四年)、一〇七—一〇五頁。

(16) Zoological Society of London Archive, Minutes of

Council, vol. 1, f. 314; vol. 4, f. 210. のよし動物園の名物

アマゾン大蛇が演藝^{イム}一八二〇四年^{モドリ}にわれたかのだ。

(17) 伊東「一九世紀ロハシハ動物園にゆかね森林の娛樂の

關係」、Kō—Kō五頁。

(18) 「趣業社」レオナルド F. Fyfe and B. Lightman

(eds), *Science in the marketplace: nineteenth-century site*
and experience (Chicago, 2007).

(19) F.T. Buckland, *Curiosities of natural history*, 2nd ed.

(London, 1858), p. 60.

(20) *Little Folks*, issue 51, 1871, p. 395.

(21) T. Wallace, *The happy family: a picture from life* (London, 1849).

(22) *Children's Friend*, 1 Oct. 1873, p. 146; *Children's Treasury*, 5 June 1880, p. 265-266.

(23) Frost, *Circus life and circus celebrities*, p. 262.

(24) H. Cunningham, 'The metropolitan fairs: a case study in the social control of leisure', in Donajgrodzki (ed.), *Social control in nineteenth-century Britain* (London, 1977), pp. 163-84. 三畠留夫「一九世紀ヘボニカヘ編む『如獣園 娯樂』」母本論「巡遊『船市の社会』」(「ベルクハーフ園、一九八〇年」、一一九四—一一一八頁)。

(25) H. Cunningham, 'Leisure and culture', in F.M.L.

Thompson (ed.), *The Cambridge social history of British: vol. 3, 1750-1950* (Cambridge, 1990), pp. 279-339.

(26) *Punch*, 2 Sept. 1871, p. 97.